

日本をキリストへ 協力

35

「日本をキリストへ」
伝道団体連絡協議会

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1
TEL 03-3291-5035

キリスト聖誕二千年を 画期的な証しの年に

会長 羽鳥 明

伝道団体連絡協議会の表看板は、日本にキリストの福音を満たすために、互いに連絡協議して、「協力」することです。その「協力」をテーマに、今回が第三回、最終回の紙面です。

前回、主がその恵みのご計画のもとに与えてくださる「協力」の模範的姿勢として、ゼバニヤ三・9のみことばを上げました。

「そのとき、わたしは、国々の民のくちびるを変えてきよくする。彼らはいま主の御名によって祈り、一つになつて主に仕える」

リバイバルの主の民の一致協力は、先ず第一に、主の御働きであり、主の御恵み、そのきよめの御働きのものにあること。そして、祈りの集中結果の中からクリエイトされること。更に、それは、主のくびきを負う、主と肩を一つにする主への奉仕の一致協力であること。

「そのとき」とはどんなときか。伝道宣教は「時」なしです。時がよくても悪くてもです。いつでも、「今」こそが恵みのとき、救いの日です。しか



し、すべてに時あり。主の聖誕二千年を目前にして、この時こそ、恵み、きよめ、変えてくださる主の御働きかけのもと、祈りを結集し、一つになつて協力すべきです。

二、三年前から、メンバーの一つ、総動員伝道の中から「主の聖誕二千年を画期的な証しの年にしよう」と言う叫びが生まれ、JBAに呼び掛け、伝道団体連絡協議会の中でも折々に話し合われ、とうとう全国の各地区の指導的立場にあられる教会、教団のリーダーの方たちに集まっていただき、連絡協議会の代表も参加し、去る十一月十八日に、全体説明懇談会がOCCで開催され、運動がいわば、公けに始動しました。

説明に当たったのは、総動員伝道運営委員長小助川師でしたが、その第一印象は、地方教会の牧師としての「教会の叫び」であったということでした。その席上で、伝道団体の責任者の一人でレイマンのT兄は「戦後日本の伝道団体はパイオニアとして何から何まで自分で計画し事を成し遂げようとしてきた。今や戦後五十年、伝道団体は大きく展開して、そのあるべき姿、教会に仕えるパートナーに徹する姿勢となつている」と表明しました。まことにその通りであると思いました。

堅い信仰の立場に立ちつつも、出来るだけ広く大きな協力関係を醸成するべく、今回は、話し合いの中から、全国十二の地域教会の交わりを中心とし、自主的に働き、全国連絡会を作り、全国的なコーディネートをする方策を取りました。

この中であつて、伝道団体連絡協議会は、このムーブメントの一員として密接な連絡協議にあずかるべきだと思ひます。そして、伝道協内部にあつては、同じ目的をもつ、いわば同業の団体は至急横のつながりを密にし、協議連絡し、このムーブメントに寄与する計画を立て、これを提案し、そのために準備を進めるべきではないでしょうか。たくさんさんのチャレンジがあります。

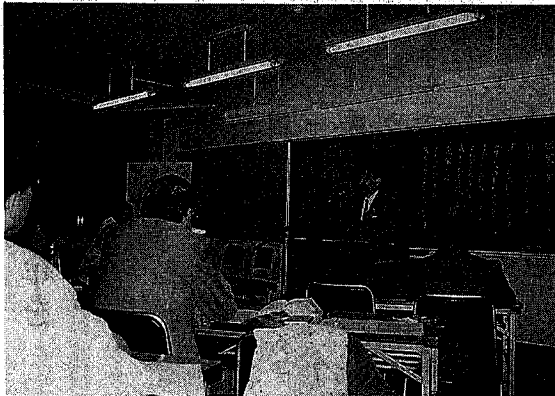
キリスト聖誕二千年を考える

小助川 次雄

二千年を前にして確実に、今しなればならないことを一緒に考えてみたいと思っています。

伝道団体の働きは教会にとって大きな意味もっています。私も恩恵にあづかってきた者の一人です。しかし、ある時から伝道団体が地方の小さな教会にとって驚異になってきたことがありました。教会員に遠慮しながら、少しずつ建て上げてきた教会を、伝道団体の一時期の働きのために大きなダメージを受けることがあったのです。地方の牧師たちが伝道団体に対して警戒をもつようになってきたのです。そのため自分の立場をしっかりと持っている牧師はガードを固くしてしまうのです。伝道団体による伝道活動のあり方を考え直さなければならぬのではないかと思います。このような研修会を通して真剣に考えていただければありがたいと思います。

伝道団体同士がもっとよく話し合ってもっと強力で協力し合って、全日本福音化のために、今の教会の現状



にふさわしく活動を進めていくことを考え直してもいいのではないだろうか。そのような中で「キリスト聖誕」の提案をさせていただいているわけです。歴史の本の中に「西暦何年」とか「紀元何年」というように出てきます。A.D.をそのように訳して用いているのです。このことがずっと気になっていました。A.D.は主の年を現しているの

です。

千年を画するのは確かに歴史の大切な区切りであると思います。その意味づけははっきりしていません。ある新聞に「第三千年期」の始まりであると書かれていました。千年期、あるいは世紀の変わり目であるという表現はあっても、それ以上の意味づけは見当たりません。その意味づけはキリスト教会が出来ることなのです。教会以外のところからは出てこないのではないかと思います。

二千年はキリストの二千年なのです。ですから教会は声を大にしてその意味を語らなければならないと思います。迎える二千年を意義深く過ごさねばならないと思います。

「外部の人に対して賢明にふるまい、機会を十分に生かしてもちいなさい」とコロサイ四・5に記されています。

日本のある宗教家がキリスト教のどなたかに「二千年はキリストの誕生二千年ですね。キリスト教会ではどのような行事をするのですか」と尋ねられたときに返事に困ったと言っています。周りの人々がそのようなことを考えているときに本家本元のキリスト教会が何も考えていないというのは主に申しわけないと思うのです。主の再臨がそれだけ近づいて来ているということ

でもありませんので、真剣に考えるべきことであると思います。

画期的な証しの年にしたいと提案しているのです。今まで出来なかったことをやってみようではありませんか。画期的なことを考え、画期的なことをやってみようではありませんか。文字通り画期的な時なのです。画期的なことを主の証しのためにしようではありませんか。福音はひとつしかない、キリストはひとりしかいらっしやらないのですから、一致して取り組めたら幸いです。違った立場に立って違ったことを言ってきたとしても、この二千年という時を迎えるにあたってキリストにある同じ立場に立って同じ目的のために心を合わせようではありませんか。出来ないこともあると思いますが、出来ることもあるのではないでしょう。皆で話し合って出来ることを見つけていこうではありませんか。主の栄光のためです。キリストの教会であり、キリストの伝道団体です。互いに助け合い、互いに建て上げられていく働きをしたいと思えます。何とかして一部のクリスチャン人口を超えさせていたがたいと願います。

具体的な案が出てくることを期待して話しを終わります。

聖誕二千年を迎える日本伝道の考察

松田 幾雄

「人の子よ。これらの骨は生き返ることができようか。息に預言せよ。息よ。四方から吹いて来い。彼らを生き返らせよ」。エゼキエル三七・3、9

島村龜鶴先生が「神の前に適役な者はだれもない」と言われたことがあります。私も本当にそうだと思っで慰めを受けました。適役でなくても神が遣わされたのであれば行ってご用をさせていただけようと思ひました。「長い話しをする必要はない。わたしが伝えたいと思ひていることを話せばよいのだ」と神に語られたように思ひてきょうの奉仕をさせていただきます。

ネブカデネザルは巨大な像の夢を見ます。ダニエル書を見ますと別の像が出て来ます。神の視点で見ると別のものに見える。日本の状況を神の視点で見たい。神にはどのように写っているのだろうか。

一、神の視点で日本の教会を

二、日本の教会の指導者の変革

三、聖霊のみ業としての日本の教会の躍進

この三つのことを一緒に考えてみたいと思ひています。

神の視点から日本の教会を見ると枯骨の谷のように写っているのではないのでしょうか。イスラエルの民たちは希望のない状況だったのではないでしょうか。神の民としてのビジョンも神の力による回復への確信も失われているもの、日本の教会に失われているもの、それはビジョンではないでしょうか。

イエス様は狭いイスラエルから出ることはありませんでした。いつも世界を見ていました。世界宣教の立場から日本の教会のあるべき姿を考えるべきでしょう。枯骨は生き返る可能性はないと思われまます。でも神には不可能はありません。

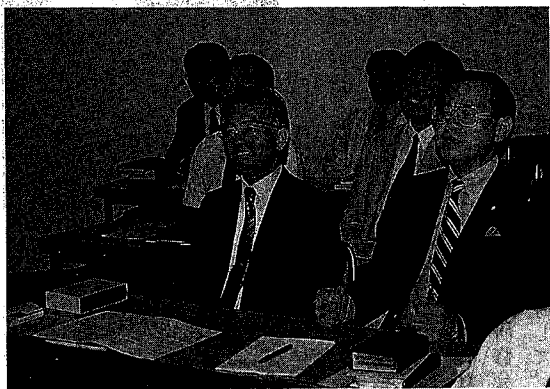
ビジョンをもっているもそれを実現させるプログラムがなければなりません。一千万救霊のビジョンがあつても、各教会でそれを実現できるようなプログラムをもたねばなりません。取り組みがなされなければなりません。

聖霊の力と確信が欠けているのでは

ないか。そこで、日本の教会の指導者の変革が求められていると思ひます。ノアはいままで経験してこなかったことに取り組もうとした時、新しい物差しを必要とした。

フラット神学校のクリントン博士が効果的な指導者の資質について次のように述べています。指導者は

- ・生涯、学習者でなければならぬ。
- ・同僚のリーダーを育成するもの、
- ・霊的権威をもって影響力を与える人、
- ・将来を展望出来る人、
- ・神のみ旨に従っている人、
- ・柔軟性のある人、
- ・模範を示せる人でなければならぬ。



前列左 松田師

神の前に自己吟味させていただこう。島村先生は日本宣教の進まない理由は、牧師にある、牧師がいかに、と言われた。指導者は神の「時」を知っておかねばなりません。バトラーの著書に二千年年までに資本主義の終焉を迎えると言ひつています。二千年という年は日本宣教と世界宣教のための最も良い時ではないかと思ひます。この時を逸してはなりません。

ハドソン・テラーは訓練の出来ていない兵士が役に立たないのと同様に訓練の出来ていない宣教師も役に立たないと言ひました。クリスチャンを主の弟子として訓練し、霊の子を産むようにしないといけない。真のクリスチャンであるならば、主のために何かをしたいと志を与えてくださるはずで、神はそれを実現させてくださる。エゼキエルに神は命令を与え、約束を与えてくださっている。



研修会の感想

一泊研修会に参加して

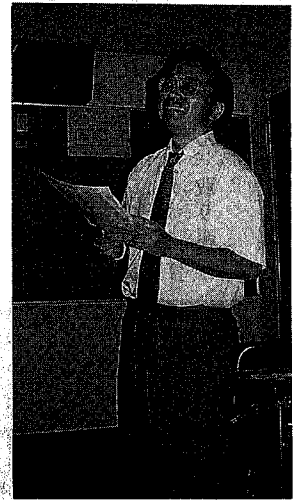
エーBA 大竹 一行

紀元二千年に向けて「日本をキリストへ」のテーマのもととる九月三十日に国立オリンピック記念総合センターを会場に実施された伝団協一泊研修会に参加した。

今回、日程、会場、テーマ、内容などで参加を決めた。久しぶりの研修会参加であった。それだけに大きな期待をもって会場に向かった。ただ、牧会経験豊かな講師によるテーマ講演は感じること、教えられることが多かった。テーマが大きく、講師の先生方の持ち時間が少ないと感じた。



分団懇談会



世話係 鈴木兄

しかし、日本全体を考えつつ、それぞれに違う角度からの講演内容に二千年に向けての大きな挑戦を受けた。

研修会に参加する前に①個人的に二千年を考えたり、②日本福音同盟宣教懇談会の分団協議（六月）で考えたり、③日本信徒前進修養会（六月）の分科会で話し合ったり、④キリスト聖誕二千年を考える会（七月）の話し合いなどで考える機会が与えられたことは感謝なことだった。一連の積み重ねの上での今回の機会であったので考えやすかった。

それにしても課題は大きく、準備の時間は短く、個人で、教会で、団体で、一体何が出来るだろうかと焦る気持ちが起こってくる。しかし、反面、あれはどうだろう、これも出来るのではないかなど考えると楽しくなる。

二千年は一度しかない。画期的な年を積極的に主を証しする年として迎えてこそ二一世紀の歩みのよいスタートとなるのではないか。教会内外に有意義な活動の計画と実施が期待されていると思う。伝道団体としての取り組みも大切だが、各個人、各教会が参加して、この世にイエス・キリストを

紹介する活動を展開してゆくには、広報と具体的な計画、さらに準備が必要であろう。

今回の研修会は、大きなテーマのもとに話し合うには時間も人数も不足していたと思う。運動は多くの人が参加してこそ大きな力となると言える。一部の人の動きにならないよう配慮しつつ、伝道団体連絡協議会としても前向きに取り組むことが必要だ。

今回の参加を通して個人的には①四年後を楽しみに過ごしていきたい。②出来ることを一緒にやっしていきたい。③「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことをまたはあのことをしよう」と言いたい。

研修会を企画してくださった役員の諸兄弟姉に感謝して。



全体司会の片岡師

発行日 一九九六年十二月十日

発行者 羽鳥 明

編集者 鈴木 繁